[趣旨説明]

日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部
丸山　千歌

○**平山**　松田先生、どうもありがとうございました。

それでは、早速パネルディスカッションを始めさせていただきます。テーマは「海外の大学が日本の日本語教育機関に期待すること」です。

まずは、パネリストの先生のご紹介をさせていただきます。

向かって右から、サンディエゴ州立大学教授、日本国際交流プログラムディレクター、アメリカ州立大学連合「日本研究セミナー」ディレクター、日暮嘉子先生。

パリ・ディドロ（パリ第七）大学准教授、大島弘子先生。

華東師範大学教授、日本語教育研究センター主任、徐敏民先生。

シドニー大学助教授　レベッカ・スーター先生。

国際基督教大学講師、小澤伊久美先生。

前日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部長、池田伸子先生。

以上６名の先生方です。コーディネーターは日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授、丸山千歌先生です。

それでは、丸山先生、どうぞよろしくお願いいたします。

趣旨説明

○**丸山**　皆様、日本語教育センター長の丸山でございます。本日は土曜日の午後というこの時間にお集まりくださいまして、まことにありがとうございます。

日本語教育センターは、2011 年４月に立ち上がりまして、今年で３年目を

迎えます。3 年目を迎えたところで、素晴らしい先生方をお招きしてこのような国際シンポジウムを開くことができますことを、大変うれしく思っております。

それでは、趣旨説明をさせていただきます。日本語教育センターは、先ほど申し上げましたように、2011 年に設置されまして、昨年、第 1 回目のシンポジウムを行いました。今回のシンポジウムが第 2 回目ということになります。**【スライド①-2】**

第 1 回目は、こちらのスライドにありますように、国際交流基金日本語教育センター所長の西原先生、石田先生、先ほどご挨拶いただきました国際センターの松田先生、グローバル人材育成センターの山口先生、そして池田先生にご登壇いただきまして、本学における、また大学における日本語教育の意義と可能性という形で、ディスカッションを深めてまいりました。**【スライド①-3】**

このシンポジウムの様子は、シリーズ新しい日本語教育を考えるという形で冊子化いたしまして、立教リポジトリーでも公開を開始しております。**【スライド①-4】**

本日のシンポジウムは、その第 1 回での議論を踏まえて、「海外の大学が日本の日本語教育機関に期待すること」というテーマで展開いたします。大学における日本語教育機関というのは、研究と、そして教育実践と、両方を行っている組織でございます。ですので、日本語の授業、そして教材開発、また FD 活動といったものも同時に展開していくものでございます。**【スライド①-5】**

この中で、これから私たちの日本語教育センターが発展していく可能性というのを模索したいのですが、一つは、日本語学習者を核とした活動というのが考えられると思います。もう一つは、どういう形で、日本語教育以外の分野への働きかけというのをしていくことができるのか、こういうところにも可能性を見いだしていくにはどのような可能性があるかという視点、そして 3 つめが私たちの、それぞれの営み、活動というのを、どのような形で位置づけて展開していくか、こういった視点も必要ではないかということです。

その意味で、例えば 1 点目の日本語の学習者を核とした活動としては、教材開発や、教師研修における国際連携、そして移動する学習者が日本研究を核として学ぶということ。そして学位の問題が出てきますし、2 点目の日本語教育以外の分野への働きかけということについては、例えば教養教育という広い領域の中で、日本研究を取り込んでいくための活動というのも考えられるかもしれません。

また、私たちのセンターの活動というのをどう位置づけ、そしてどういうふうに展開していくかというのは、プログラム評価という観点で考えていくことができるかと思います。**【スライド①-6】**

本日のパネリストの先生方は、4 名、海外のパネリストの先生方をお迎えしておりますが、その先生方には 2 つの柱でお話しいただきます。1 つは各地域の日本語教育の動向、また日本語学習者の動向という柱です。もう一点は、私が先ほどのスライドでお話し申し上げた、これからの発展の可能性というのに示唆を与える活動例というのをお話しいただきます。**【スライド①-7】**

パネリストのご紹介を申し上げます。

まず、サンディエゴ州立大学言語学・東洋語／中近東言語学部日本語科主任教授、そして日本国際交流プログラムディレクターの日暮嘉子先生には、日本語教育以外の分野への働きかけの事例として、大学の外への働きかけ、そして教養教育に日本研究を取り込むための活動という実践をお話しいただきます。**【スライド①-8】**

そして、お二人目のパネリスト、大島先生は、パリ第七大学にお勤めでいらっしゃいますが、移動する日本語学習者を格とした活動の例として、移動する学習者が、日本研究を格として学び続けるための取り組みということについてご報告いただきます。**【スライド①-9】**

そして、3 人目のパネリストでいらっしゃる徐敏民先生。華東師範大学からお越しいただきましたが、日本語学習者を核とした活動の事例といたしまして、教材開発、また教師研修における国際連携の事例をお話しいただきます。**【スライド①-10】**

今ごらんいただいている教科書は、『新界標日本語』といって、徐敏民先生と私が中心になって開発している、華東師範大学、そして中国の華東地区に恐らく広がっていくであろう教科書でございますが、合計 4 冊の構成となっております。ちょうど第 1 冊が今年の 11 月に出版されたところでございまして、3 冊、4 冊は立教大学との共同開発というプロジェクトで進んでまいります。**【スライド①-11】**

4 人目のパネリストをご紹介いたします。レベッカ・スーター先生。シドニー大学からお越しいただきました。レベッカ先生には、日本語学習者を核とした活動の事例として、学位、ダブルディグリーへの取り組みをお話しいただきます。**【ス**

ライド①-12】

　そして 5 人目のパネリスト、小澤伊久美先生。国際基督教大学からお越しいただきましたが、小澤先生には、それぞれの活動をどのように位置づけ、展開していくかという観点から、プログラム評価についてお話しいただきたいと思います。**【スライド①-13】**

　そして 6 人目のパネリスト、池田伸子先生。本学の前日本語教育センター長ですけれども、池田先生には、では、立教大学はどうするのかということで、5 人のパネリストのお話を受けて、本学の日本語教育センターの理念と可能性についてお話しいただきたいと思います。**【スライド①-14】**

　6 名のパネリストの先生がたからのお話の後、皆様と全体討議を進めてまいりたいと思います。それぞれのパネリストの先生方の持ち時間は 27 分。30 分を超えないようにと思っています。それぞれのご発題の中で、まず短い時間ですが、質疑応答を経て、全体討議の中では、また少し論点を絞りまして、会場の皆様と一緒に議論を深めてまいりたいと思います。皆様の積極的なご発言をお願いいたしたいと思います。ご協力、よろしくお願いします。**【スライド①-15】**

○**平山**　丸山先生、ありがとうございました。

　それでは早速、お一人目の日暮先生よりご発題いただきます。日暮先生、どうぞよろしくお願いいたします。そのほかの先生方は、どうぞお席にお戻りください。

【スライド①-1】

海外の大学が日本の
日本語教育機関に期待すること

趣旨説明

立教大学日本語教育センターシンポジウム2013
2013年12月21日
日本語教育センター長
丸山千歌

【スライド①-2】

日本語教育センター

＊ 2011年　センター設置

シンポジウム
＊ 第1回　2012年12月4日
＊ 第2回　2013年12月21日

【スライド①-3】

昨年度（第1回）シンポジウムでは…
「大学における日本語教育の意義と可能性」

1　講演 「大学の国際化と日本語教育」
西原鈴子氏（国際交流基金日本語国際センター所長）

2　パネルディスカッション「立教大学の国際化と日本語教育」
＊ 石田　敏子 氏　（筑波大学名誉教授）
＊ 松田　宏一郎　氏（国際センター長、法学部教授）
＊ 山口　和範 氏　（総長室調査役、グローバル人材育成センター開設準備室長、経営学部教授）
＊ 池田　伸子 氏　（前日本語教育センター長、異文化コミュニケーション学部教授）

【スライド①-4】

シンポジウム冊子
シリーズ　新しい日本語教育を考える

2013/12より
立教リポジトリで公開開始

【スライド①-5】

本日のシンポジウム
「海外の大学が日本の
日本語教育機関に期待すること」

＊大学の日本語教育機関
　＝　研究と実践
　→　日本語授業
　→　教材開発
　→　FD活動

【スライド①-6】

これからの発展の可能性

＊ 日本語学習者を核とした活動
　教材開発・教師研修における国際連携
　移動する学習者が日本研究を核として学びつづけること
　学位　ダブルディグリー

＊ 日本語教育以外の分野への働きかけ
　教養教育に日本研究を取り込むための活動

→　日本語教育センターのそれぞれの活動を
　どう位置づけ展開するか
　プログラム評価

【スライド①-7】

海外パネリストによる講演の柱

＊　各地域の日本語教育・日本語学習者の動向

＊　これからの発展の可能性に示唆を与える活動例

【スライド①-8】

パネリストご紹介（1）

日暮　嘉子 氏
（サンディエゴ州立大学　言語学・東洋語/中近東言語学部
日本語科主任教授・日本国際交流プログラムディレクター）

日本語教育以外の分野への働きかけの事例
大学の外への働きかけ
教養教育に日本研究を取り込むための活動

【スライド①-9】

パネリストご紹介（2）

大島　弘子 氏
（パリ第7大学　東洋言語文化学部　准教授）

＊ 日本語学習者を核とした活動の事例（1）
移動する学習者が日本研究を核として学びつづけるための取り組み

【スライド①-10】

パネリストご紹介（3）

徐　敏民 氏
（華東師範大学　日本語学部教授・日本語教育研究センター主任）

＊ 日本語学習者を核とした活動の事例（2）
教材開発・教師研修における国際連携

【スライド①-11】

『新界標日本語』

計4冊（1，2冊　…初級）
（3、4冊　…中級、中上級）

第1冊　2013年11月刊行

3，4冊は　立教大学との共同開発

【スライド①-12】

パネリストご紹介（4）

レベッカ・スーター氏
（シドニー大学　日本研究学科　助教授）

＊ 日本語学習者を核とした活動の事例（3）
学位　ダブルディグリー

【スライド①-13】

パネリストご紹介（5）

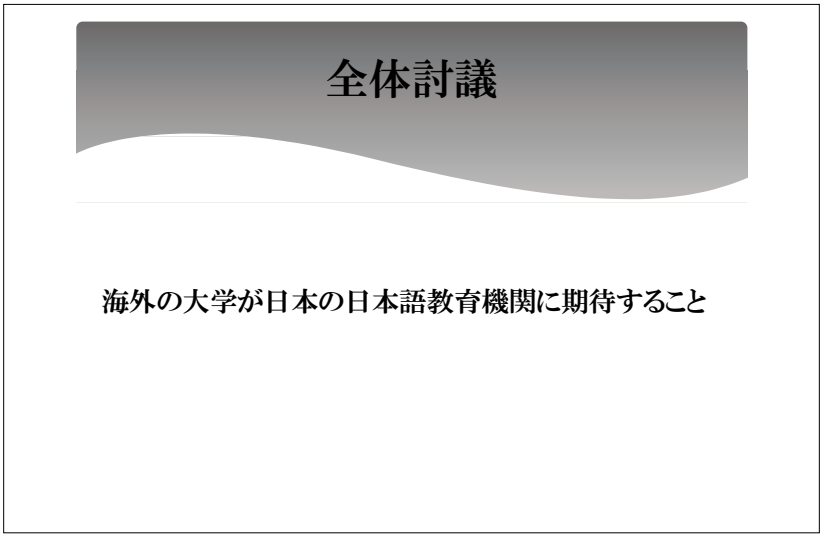
＊ 小澤　伊久美　氏
（国際基督教大学　日本語教育課程　講師）

＊ 各々の活動をどう位置づけ展開するか
プログラム評価

【スライド①-14】

パネリストご紹介（6）

＊ 池田 伸子 氏
（異文化コミュニケーション学部教授、前日本語教育センター長）

＊ では立教大学では…
立教大学日本語教育センターの理念と可能性

【スライド①-15】